

新岡垣風土記

第440回

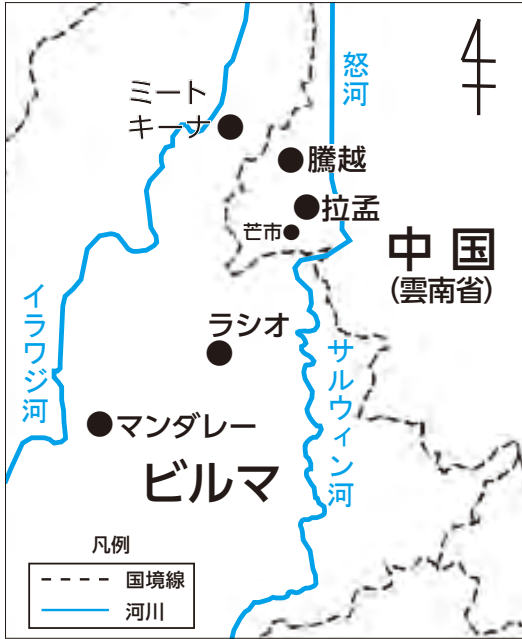
ミャンマー（ビルマ）と岡垣④

岡垣歴史文化研究会 入江 東樹

〈ビルマ戦：北東部の戦い〉

ビルマを制圧した日本軍は、アメリカに支援された中国軍が攻撃してくるのを防ぐために、ビルマに隣接している中国（雲南省）の拉孟や騰越に、龍師団（前号で紹介）による守備隊を配置した。

龍師団による拉孟守備隊と騰越



〈拉孟守備隊の戦い〉

1942（昭和17）年6月、守備隊が拉孟に進駐後、すぐに陣地構築が始まった。約2年かかった。平地でなく、高地だった。

守備隊のことを、『菊と龍』相良俊輔著）をもとに紹介する。

この間、日本から、報道班や慰問団が守備隊を訪れた。1942年の暮れ、女流作家の水木洋子らが、ビルマ側から現地ルポの取材にやってきた。

翌年の春、日本放送協会（NHK）から派遣された慰問団が、トラックでやってきた。浪曲師の春日井梅鶯や歌

手の奥山彩子ら十数名の一行だった。

1944（昭和19）年5月、中国軍がビルマとの国境近くを流れる怒江（河）上流付近から、渡河進撃を進めようとした。

同6月2日、中国軍が拉孟守備隊に対し、攻撃を開始した。中国軍は約二十万人の大軍で、指揮者は米軍のスチルウェル中将だった。装備も米軍式に近代化されていた。

これに対し、拉孟守備隊は、わずか千三百名だった。兵力差だけでなく、火炮や弾薬、食糧の補給など圧倒的に貧弱だった。

同6月22日、守備隊はなんとか中国軍を押し返した。

同7月4日、中国軍の第2次攻撃が開始された。拉孟守備隊の戦死者が増えるなか、陣地を守った。

同7月20日、中国軍の第3次攻撃が開始され、ロケット砲も使用してきた。守備隊は、三百名足らずとなった。

同8月24日、入江溜さん（町内糠塚区）の叔父（父の弟）である入江正則さんは拉孟守備隊の一員（陸軍伍長）だったが、中国軍の攻撃を受け、戦死された。28才で独身だった。

同9月7日、拉孟守備隊は、全滅した。

〈騰越守備隊の戦い〉

騰越には騰越城があり、周囲に城壁をめぐるらせていて、1630

年（明の時代）頃に築造されたという。城壁の周囲は、約四キロあった。ここを陣地にしたのは、龍師団の歩兵第百四十八連隊だった。

龍師団司令部は中国領の芒市にあって、騰越に連隊本部があった。兵士らは約一万一千人で、岡垣からの兵士もいた。

1944（昭和19）年5月から、中国軍の2度にわたる大がかりの攻撃を受けた。

守備隊は、騰越城を陣地とする籠城戦に入ることになった。城内だけでなく、外郭陣地にも兵士を配置した。守備隊の将兵は、約二千名だった。

騰越城周辺は、中国軍五万の大軍に囲まれた。

同5月17日、「龍6739部隊」に所属されていた岡垣村吉木の今瀬友秋さんは、ここ騰越で戦死された。

同7月26日、中国軍の戦闘機による爆撃や銃撃、陸上からは迫撃砲やバズーカ砲と、空陸一帯の攻撃が始まった。

それから一カ月、日本軍による騰越守備隊への物資の補給は断られた。

同9月12日、守備隊の太田大尉は五、六十名を城外に脱出させたらしいが、その中で生き残った兵士は二人だったという。

翌日の13日、中国軍の総攻撃の中で、騰越守備隊は全滅した。

つづく

※新型コロナウイルス感染症の影響により、イベントなどが中止または延期になることがあります。各イベントが開催されるかどうか分からないときは、担当課または主催者に問い合わせてください。